

# 大学生研究フォーラム 2010

## 趣旨説明

京都大学 高等教育研究開発推進センター/准教授 溝上 慎一

改めまして京都大学の溝上です。宜しくお願ひ致します。本来ならばこのような話は一番最初にしするものなのですが、色々関係者と議論がありまして、このタイミングでさせていただきます。

まず、なぜこの大学生研究フォーラムなのかということですが、私たちは京都大学の高等教育研究開発推進センターと財団法人電通育英会との共済事業で大学生研究プロジェクトを進めています。そのうちのひとつに大学生のキャリア意識調査という全国調査というものがあります。そして、大学生の全国調査というのは、2、3 大きいのが実施されていますけれども、私たちはキャリア教育とか、あるいは学生の学びと成長、学業ということをテーマにそういう指標で全国調査を行っていきたいということで、私たちは私たちがやっていくと。その成果報告を色々していきたい、そういうのがひとつあります。3 年に 1 回ずつやっていこうということで、2007 年に初めて行ったのですが、その後色々やりながら、今年また 2010 年の調査準備を進めております。これを 10 年くらいはやっていきたいというのが私たちの当初の話です。

もうひとつは、この大学生研究フォーラムでありまして、皆さんもご存じのように、大学生の調査というのは調査の分析とレポートで終わることが往々にしてあります。他方、実践の方は実践の報告で終わることが多い。どちらも関係することがあまりないので、私たちは調査をやりながら実践とつなげたい。調査が実践にどういふ示唆を与えるのかということも披露したい。そういう場として大学生研究フォーラムを開催しています。このフォーラムとかプロジェクトを通して私たちがテーマにしていますのは、この蓄積と継承でありまして、毎年一回開催していますが、お祭りではいけない。議論したことが沢山あって、全てが継承できるわけではないにしても、何かしら毎年つなげていって、そこから発展していくような議論、あるいはそこから見えてくる課題を調査分析していきたい。そのような活動をしていきたいというのがありまして、それを大きな課題にしているわけです。

そして、今日、我々がこういうフォーラムに関して継承しているものが何かということをご説明しますが、大学生のキャリア意識調査 2007 からずっと引き継いで、もう色々なところでお話しますが、2 つ実践的につなげる示唆、あるいはアセスメント、指標という形で提示しています。ひとつは学生のタイプですね。とにかく私たちは学生を自分の経験で語らない。学生をひとくりにしてこうだ、と言わない。少なくとも 4 つか 5 つくらいには分けて、色々学生の特徴を見ながら実践や理解をしていきたい。その時に、何を指標にするのかということが研究になっていきます。私はこういう時に、実践的な接続がなされる観点であることが必要だと考えていまして、それを具現化するのに大学生活一週間の過ごし方。ここで学生が分かれてくる。こういうふうな結果になればもう最高でして、そういうふうになってくる結果を一つ皆さんに提示しているわけです。こちら辺は詳しいお話はでき

ませんが、先程の継承問題、そしてこれまでのフォーラムの議論も含めて、電通育英会のHPに議論が残っておりますので、関心のある方は是非ご覧いただきたいと思いますが、簡単に申し上げますと、学生生活、一週間色々なされていますけど、大体3つくらいに分けて考えられるというのがひとつの分析結果になります。授業外学習、読書、インターネット、ゲーム、マンガ、それから友人、クラブ・サークル。こういうものに1週間何時間費やしているのかという、量が質を規定することは無いのですが、やはり量である程度見ていこうという最初の基本スタンスをここで表しています。授業外学習の読書は結構、やっているかやっていないかということで学生が分かれます。インターネット・ゲーム・マンガに時間を費やしているか費やしていないかで分かれてくるなんていうことで学生を見ていく。そして、授業やアルバイトは同じように聞いているのですが、学生を一週間の生活から分けている時に分類にきいてこないですけど、これは多分多くの学生が授業には参加するし、アルバイトもしているので、こういうのでは学生は分けられない。そういうふうに理解はしています。

この3つの得点の高低というか掛け合わせて、学生を分けていくと、こういう4類型になります。で、一番注目しているのはタイプ3です。1週間の生活の中で、この3つに比べて相対的にですが唯一授業外学習の読書を結構している。他方で友人、クラブ・サークルの活動時間も結構費やしている。ゲーム、マンガもよくやっている。つまり、結構なんでもかんでも活動している非常に元気な学生。私たちはこれを良く学び良く遊ぶ学生と言っていますが、これは非常に理想的だと。他方で、自分ではあまり勉強とかはしないけれども、友人・クラブ・サークル、この得点が高い。対人関係や対外的な活動に1週間の時間を費やしている学生群。同じように見てインターネット、ゲーム、マンガに多くの時間を費やして他のところが低い、あるいはこの指標では特徴がない。こういう4類型を色々見出しています。で、色々掛け合わせて特徴を見ているのですが、大学生活の充実度、キャンパスライフの充実度ということであればこのタイプ3とタイプ4は優位差はありません。どちらも結構元気な学生です。でも指標は色々ありますが、将来に向けて色々頑張っている、目標があつてそれについて取り組んでいる。自分は大学教育の色々な活動を通じて成長していると実感しているのはタイプ3です。4もないわけではないのですが、3に比べたら弱い。こういうのが一つありますね。私たちはここに実践を何とか合わせていきたい。こういう感じがあります。もうひとつの指標は、2つのLIFEと私が呼んでいます。将来の見通しと日常生活の接続であります。これまでキャリア教育とかの関連も合わせて学生に将来の意識やビジョンを結構聞いてまいりましたが、日常と繋げて何を頑張っているかという話が続かない学生が物凄く多いという印象。私たちの個別のデータでもありましたし、是非それを全国データで示したい。そういう感じを出しているのがその結果であります。やはりですね、ずっと観てきたのと同じような感じで将来の見通しがあつて、何を日々頑張ったらいいかという理解があつてそれをやれてるのは医療系も含めているので結構大きい数字です。それでも4分の1しかない。医療系をどけて分析したら15%くらいしかない。ですからそれ以外の学生は見通しがあつても何やったらいいか分かっていてもやってない。これは面倒くさいとか忙しいとかやる気がないとか私たちにもあるような理由が色々あるのですが、いずれにしても将来の意識と日常を繋げるということが大学生にとっていかに難しいということはこの図から明らかですね。で、繋げる必要があるのか。そういうことが一つ観点でありますけれど、私はつなげなければいけないと思っ

ています。

こういうことを色々アセスメントの指標として提示しながら議論をしてきているのですが、大学生研究フォーラム、2年前の議論では、こういうデータを専門の関係者がどういうふうに見るのかという議論をしてもらいました。私も私なりの観点で語るところがありますので、そういうところを補ってもらわけですが、竹内清先生という社会学で有名な先生はこういうデータを見て、やはり仲間、キャンパスの中で仲間の持つ意味ということをやっぱちゃんと押さえていけないといけないことを非常に多くの時間を割いて議論されました。偏差値の高い大学に行きたいのは有名な教授陣や最先端、そういうこともあるでしょうけれども、やはり良い仲間、将来を支える良い先輩後輩。こういうことに会って成長していくということも大学の大きな文化力でありまして、そういうことをアセスメント入れていくべきだとおっしゃいました。浅野先生は社会学的な非常にいい議論をしてくれまして、「親密な他者、親密圏」と仰いましたが、仲のいい友達としゃべるようなおしゃべりが大事なのである。もちろんそれは大事なのですが、大学の非常に重要なところは自分が親しくない、自分が日ごろやっていること、AとやっていればAと繋がるような他者ではなく、公共の他者ですね。自分の日常を知らない他者。そういう人たちと出会っていく場。そういう公共圏の性質がある。そういうところでコミュニケーションしていく。コミュニケーション能力を育てる場でもあると、そう仰ってまして、私たちはコミュニケーション能力と言うときになんかおしゃべりみたいな話でいう人もいますが、もうちょっと自分の日常世界から遠いような地位、或いはその体系的抽象的になって自分の理解になる。その理解を持って見知らぬ他者と議論するとかですね。そういった場を提供するのが大学だと。私なりに解釈するとそういうお話をしてくださったのですが、地方都市の若者なんかがこう公共圏に出ていかないことで非常に弊害があるというお話をされまして非常に面白かったですね。

それで、追跡調査を労働政策研究研修機構の下村先生にお願いしました。1回生3回生が対象ですから、その3回生が1年後に就職活動を終えてどういふ感じで、どういふ学生が就職活動に成功していたのか、そういう分析をして頂いたのですが、その中で見えてきたのやはり一つ、対人関係ということですが、他方でやはり勉強もちゃんとしている。そういう学生が就職活動を成功させている。就職活動を成功させること。それ自体は大学教育の目標ではありませんが、それでもここが抑えられないと学生の未来も大学の未来もありませんので、そういう意味でいい結果を出して下さったというふう思うわけです。昨年もこういうものを通して対人関係或いは学業をどういふふうに大学教育全体の中で具現化していくか、実現していくかということを実践報告として学生さんも交えながらやりました。で、今年はその第二弾をやります。私はこの後も引き続いてちょっと時間ありませんので引き続き事例報告にいたしますが、中原先生も午前中に仰っていましたが、やはりその学生の日常、将来を日常につなげていくきっかけとなるのはひとつは他者。或いはリフレクションということがあると思います。そういう場を京都大学のセンターで実現してちょっとやってみた。そういう報告をいたします。

番田先生はキャリアセンターの先生でありまして、そこから正課に繋がっていく部分がどういふふう考えられるのかというのをセンターの取り組みを交えてお話しいたします。で、梶原先生は工学部という場ではありますが、正課教育の学部長さんというお立場ですので正課教育の中で、色々

取り組まれるわけですが、その中からキャリア教育への課題や、あるいは橋渡しがどういうところで出てくるのかというお話をさせていただきます。

その後は発表者は全員下に降りて先程の高橋先生をはじめ、渡辺三枝子先生、加藤敏明先生を含めて3人に自由にパネルディスカッションをしていただきます。私も報告者ですので変なファシリテーションはしませんで、もう偉い先生方ですので自由にご披露して頂くようお願いしています。特に渡辺先生や加藤先生は大学の中で学生を育て、産業界と繋ぐ役割をされている方ですが、渡辺先生はキャリアガイダンスですね、ああいうものの策定にも関わられた中心の先生でありますので、そういったものも含めて議論して頂けるものと期待しております。